

智民の系譜を語る

公文俊平 (GLOCOM所長) ●インタビュアー／石橋啓一郎 (GLOCOM研究員)

2

石橋 前回のインタビューは1993年の日本の状況と、今のアメリカの状況が似ているという話から始まり、日本とアメリカが追いつ追われつしながら、今は日本の方が進んでいる部分もあるというお話でした。その中で、「智民」が果たしている役割の変遷についてのお話がありました。今回はそのことについて、おうかがいしたいと思います。

いわゆる智民といってもいろいろな言葉や概念があり、時代によって形が移り変わってきていて、日本とアメリカでもかなり形が違うのではないかと思います。呼び方だけでも、以前、会津泉主幹研究員が別のミーティングで、マイケル・ハウベン「ネティズン」、公文先生の「智民」、ハワード・ラインゴルドの「スマートモブズ」などをあげていましたが、他にどのようなものがありますか。

公文 マイケル・ハウベン「ネティズン」の出発点になると思います。彼は "net-citizen" を縮めて "netizen" としました。私はそれを日本語で「智民」と言い換えたわけです。最近のラインゴルドの本では「スマートモブズ」という言い方をしている。リチャード・フロリダの近著 (*The Rise of the Creative Class*) のタイトルに出てくる "creative class" という言葉もその系譜に連なるものでしょう。それから古くは1960、70年代にテクノクラート論というのがあって、そのときにも新しい階級の誕生ということが盛んに言われました。また、サイボーグの研究者として有名なトロント大学のステーブ・マンは、ヒューマニスティックな知性 (HI) というコンセプトの下に「スマートピープル」という言葉を提唱しています。

そこで歴史の話に入ると、私の分け方では産業化の次の局面にあたる情報化の局面は、知的なエンパワーメントの起こる局面だと考えています。しかも、今はまず、18世紀の後半から19世紀にかけて第一次産業革命が起こったのと同じように、20世紀の後半から第一次情報革命と呼べるものが始まった局面に

あたると考えてみてはどうだろうか。また、第一次情報革命自体の中では、だいたい25年ぐらいで、いわば小局面の展開が起こっています。つまり、1950年代に第一次情報革命が出現の出現をしたとすれば、70年代の後半ぐらいには出現の突破が起こり、21世紀になると出現の成熟に向かう。これが初期智民の出現と突破と成熟という動きに対応していると考えてみたい。

第一次産業革命の担い手は「市民(ブルジョワ)」と呼ばれ、特にマルクスは「ブルジョワ革命」という言い方をしました。新しいエンパワーメントを具現しているような存在、新しい階級ないし集団として社会の中に出て来てその変化を引っ張っていったのが、産業社会のブルジョワジーだったわけです。それと同じように、第一次情報革命を最初に引っ張っていくような知的にエンパワーされた人々の集団が考えられるだろう。さきほどの分け方に意味があるとしたら、最初の智民たちは、1950年代以来、出現、突破、成熟という三つの局面を経ながら成長していくでしょう。一番初めに出てくる、いわば元祖智民にあたる人たちはたぶん、1950年代、60年代の「テクノクラート」と呼ばれた人々ではないか。科学者や技術者、あるいは法律家として辣腕を振るった人たちです。それまでの貴族だとか、家柄がいいとか、大金持ちとかいうのではなく、むしろ、学歴、学識、自分の知能によって頭角を現して、既存の政府や大企業のなかで、指導的な役割を發揮するようになる。そのもっとも最初の例は、「マンハッタン計画」を引っ張った科学者たちではなかったのでしょうか。そのころから国の政策に対して発言力の強い科学技術者たちの集団が台頭してきて、そこから、テクノクラートとかテクノクラシーという言葉が出てきたのではないかと思います。第一次情報革命はたまたま時期的に第三次産業革命と重なっているので、そういう人たちの多くはコンピュータとかかわりが深かったということが十分あり得る。あるいは、コンピュータ産業そのものがテクノクラート型の人々によって

引っ張られていたという見方もできます。

1950年代から60年代にかけて、アメリカの大きな大学に一齐にメインフレーム・コンピュータが入ってくる。しかしコンピュータ・ルームにはIBMなどから派遣されてきたネクタイを締めたテクノクラートが傲然と座っていて、大学の学生たちは「俺たちの自由に使いたい」とそれを眺めていた時代です。そこで、そういうテクノクラートに対する一種のカウンターカルチャーとして出てきたのが、アイビーリーグなど一流大学の学生で、コンピュータに関心が深く、使う力も持っていた連中、そしてコンピュータを自由に使う力を手に入れたいと思った連中、これがハッカーです。表の世界ではテクノクラートが闊歩し、その裏ではカウンターカルチャーとしてのハッカー文化が育っていたけれど、このハッカーもある意味でエリートだったというのが初期智民の出現局面です。

その次に第三次産業革命でいうと、コンピュータ産業のダウンサイジングの局面に入ってきます。半導体、マイクロチップが出てきて、1970年代の後半から80年代にかけてパソコンが登場しました。そのころ智民の世界で起こっていたのは、後に言うギーク——ジョン・カツが著書『GEEKS ギークスービル・ゲイツの子どもたち』の中で生き生きと描いています——の誕生です。そのころになると、主役は大学院生ではなく、大学学部生から高校生になる。彼らは高校の中では一風変わっているけれど、コンピュータにはめっぽう強い。ふらふら大学まで出かけていってとんでもないプログラムを書いて重宝されたりするけれど、着ているものも、することも、思想も変わっているから、高校中ではいじめられたり、差別されたりする。そういうことでギーク——これはもともと悪い言葉、差別語だった——と呼ばれていた。その人たちが大きくなり、1980年代から90年代になると、しだいに既存の企業や政府にも入っていった活躍するようになり、そういう人たちがいなければシステムが動かないということになる。

もう一方で、1970年代後半から80年代にかけて、「ネットワークング」だとか「水瓶座族の共謀」、「ア

クエアスの時代」という言葉がはやり、それまでの産業社会の市民とは違った意識や行動様式を持った人たちがたくさん生まれてきた。彼らとギークは結びつきがいい。そのルーツはというと、1960年代のヒッピーのような産業社会そのものに対するカウンターカルチャーが、特に西海岸でドラッグとも結びついて出てきた。ヒッピー文化そのものは70年代に入ってだんだん凋落していったかには見えたのですが、その特徴の一部を受け継いで育て、花を咲かせていったのがたぶん、個人のレベルで言えばギークたち、そして組織のレベルで言えば、既存の階層型の組織ではない、ネットワーク型の組織と言われていたNPOやNGOだったという感じがします。

石橋 僕はヒッピーについては机上の話でしか知らないのですが、彼らには思想的な背景があったと聞いています。ギークの成り立ちを聞いていると思想的背景があるというようには思えませんが……。

公文 もちろん思想運動というわけではないけれど、ギークたちは、嫌われバカにされ恐れられる一方で、思想的にはカウンターカルチャーであったヒッピーたちに共感する点が多く、リバタリアンだったとカツは描写しています。初期のギークで右翼というのはあまり聞きませんね。

そういうNGO、NPOとギークの台頭した時代があって、そのなかでギークたちは、自分たちの社会的地位を高めていく。自信に満ちてくる。そういうなかでいよいよ初期智民たちの成熟の局面が始まってきたと思われます。その新局面を主導していくのは、ギークと言うよりはむしろ、ラインゴルドの言う「スマートモブズ」——ギークたちの次の世代——です。たとえば、携帯電話を使ってテキストメールを送って連絡を取り合う。もちろんウェブとかブログ(blog)もやるけれど、必ずしもテキー(techie)というわけではない。もっと普通の人がたくさん集まって、新しい通信機器や手段を使って一つのグループとして活動するようになる。そして彼らは、確かラインゴルド自身がどこかで書いている

たと思いますが、「ギークを置き去りにして進んでいる」。つまり彼らはもともとギークではなく、極端に言えば、コンピュータのことは何も知らない。あるいはその単なるユーザーにすぎない。けれど、やっていることは政治的、文化的におもしろい。最初はどちらかというと変わった連中だとバカにされていたのが、数の上で多数になってきて、自分たちがモバイル世代であるという自覚を持って行動するようになるかもしれない。そうなれば、まさしく新しい局面です。

石橋 逆に言うと、いまはまだその局面には至っていないということですか。

公文 少なくとも、それが本格化するには今後10年、20年かかるでしょう。今はまだそのはしりというところではないか。日本の一部や北欧の一部、あるいはフィリピン、韓国でそういう人々が大量発生し始めた。

石橋 智民の系譜に連なる人たちは、最初はずごく高い地位にあたり、専門的だったものが、ギークやスマートモブズになるに至っては、突出しているとは言え高校生や一般大衆になっています。だんだん咀嚼され、一般化されて広がっているという全体的な傾向が見えるのでしょうか。

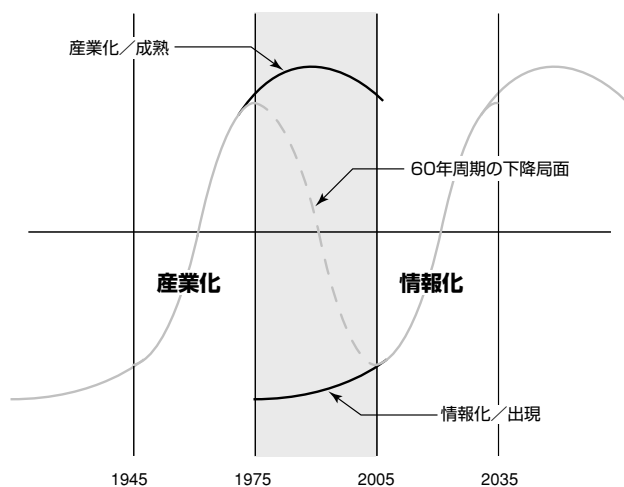
公文 そういう意味で、テキー度というのか、テキーである度合いは落ちているかもしれないが、数でいうと増えている。しかし、前の世代の一般の人たちに比べると、ある種の技術力というか、情報を扱うスキルにおいてはだんぜん上がっているということでしょう。

石橋 さきほどの新しい世代が右か左かという話も気になります。それからネティズン、スマートモブズ、クリエイティブ・クラスもアメリカの話ですが、日本ではどうですか。

公文 日本については、私は「60年周期説」という議論をしています。これは、出現、突破、成熟という局面を持つだいたい90年ぐらいのS字型の波が、60年ごとに現れてくるという議論です。60年サイクルの下降部分は、古いS字波が成熟する一方、新しいS字波が出現している局面にあたります。現在の日本はまさにそういう下降局面の最後にさしかかっています。つまり、1975年から2005年にかけての60年サイクルの下降局面は、一方で日本における産業社会が成熟し、他方で日本における情報社会が出現してきている局面にあたると見られます。

ここで言いたいのは、出現してくる側は、この局面ではまだ世の中を引っ張っていく力はそれほどない。むしろ既得権益を持った人の方がはるかに圧倒的な力を持っている。私の考えでは、新しい勢力として出現してきている人たちの意識や行動様式を、既成の勢力が持っている政治イデオロギーと比較して位置づけをするとき、そこに右か左かという軸を持ち込んでも意味がない。なぜなら、右左という分け方は、既成のシステムの中での主流対傍流、体制派対反体制派の軸ですから。戦後の日本でいうと、産業化の突破から成熟にかけての局面のときは、主流は自民党に代表される保守、傍流が社会党に代表される革新でした。そこで人々は「保守対革新」を「右対左」という分け方でもって見ていたわけです。しかし新しく出てきている人たちは、その対立軸の外にある。つまり、現在の社会の底辺ないし周辺にあって、新たに出てきている。そして次の突破局面で表舞台に登場して世の中を引っ張っていく。そういう人々の持っている意識や行動様式は、その一つ前の局面の主流や傍流の対立軸で測っても測れない。

この仮説に意味があるとすれば、それと同じことが一つ前の産業社会のイデオロギーについて言えるはずで、たとえば戦後の日本社会のイデオロギー、その中で対立軸は戦前のそれとは質が違うということになる。ではどう違うのだろうか。一つのアイデアですが、戦後のイデオロギーは、「保守であれ革新であれ、もう国家は厭だ」というものになったと言えないか。明治の日本の近代国家を支えた人たち、



戦後日本の60年周期

明治のイデオロギー、典型的には福沢諭吉のそれが代表的でしょうが、彼のバックボーンにあったのは何かというと、「門閥制度は親の敵」、つまり徳川の身分制は願ひ下げにして欲しいということだった。そして、新しい文明、イデオロギーの担い手として登場した彼は、当然、近代的な主権国家を重視したわけです。他方、戦後の人々が重視したのは企業で、会社人間であることが重要だとされた。労働組合は企業と対立しましたが、企業を否定しているわけではない。しかし国家となると、「あんなものはたまらない。俺たちを戦争に引きずり込んで、敗戦の憂き目まで見させたではないか。たまったものではない」という見方になったのではないか。少なくとも自分に奉仕してくれる「行政」はあっていいが、自分が奉仕する対象としての「国家」なんか願ひ下げだとされたのではないか。

そういうわけで、もっと詰めて考えてみなくてはならないことも多いのだけれど、とりあえずここで言いたいのは、新しい時代の主役は前の時代に主流反主流を問わず普遍化していたイデオロギーそれ自体を質的に否定していて、そこを抜けたところに次の立脚点を求めているということです。そういう意味で、戦後の日本の立脚点は国家ではなくて、経済・社会の発展であり、その支柱となる企業でした。そ

れからすると、次の情報化局面を引っ張る人びとの立脚点は、国家でも企業でもない別のものになる可能性が強い。それを説明するために、これまでのような保守対革新とか右翼対左翼という言い方を当てはめても、ほとんど何も言ったことにはならないのではないか。

石橋　そうすると、もう次の立脚点は見えていなければならないわけですね。公文先生のお考えで、それを一言で表す言葉はありますか。

公文　そうですね。今、日本で広く使われている言い方をすればオタクと称されているような人々がそれを代表すると言えば言いすぎかな。しかし、そのような人びとの間で育まれてきている、あるいはだんだん勢いを得てきている考え方、と試してみてもどうか。

そうはいっても、それを表す言葉はポジティブには出てこないな。強いて言えば、「仲間」かな。とりあえずネガティブに言えば、国家はうんざりで、さらに会社もうんざりだということではないか。会社がうんざりだから国家に帰るということを期待している向きがあるかもしれないけれど、それはない。北朝鮮の問題もあり、部分的に世の中は国家というものの重要性を見直す方向にあることは間違いないけれど、それがかつてのナショナリズムに帰ることを意味しているかということ、たぶん全然違うだろう。

石橋　たとえば、60年前の日本だとすると、第二次世界大戦のころです。その前の30年間(つまり第一次世界大戦あたりからの30年間)は高度産業化(重化学工業化)がようやく始まった段階でした。その時代、その30年間に2番目の波の全体の方向性を示すような考えが見えてきていたのであれば、今、次が見えていてもおかしくないですね。

公文　その時代は、イデオロギーという点で言うと、大正デモクラシーのようなある種の個人主義的な文化、さらに言えば永井荷風とか坂口安吾のよう

な人の考え方、国家はうんざりだと、国から距離をとろうとする考え方が台頭していたように思います。そのころは、そういう人びとはどちらかというと非国民扱いされた。とはいえ、共産主義者のように危険ではない。共産主義者は既存の社会の中で戦っていますから、ある意味で体制内の存在です。そうではなく体制の外に出た、偏屈な人間であり、アウトサイダーだった人の中に、戦後のイデオロギーの源流がたぶんあったのだろう。

石橋　それとパラレルだと考えれば、オタクやギークの中に次の時代のイデオロギーがあってもおかしくはない。

公文　そうです。しかし次に何が起こるかは、今、見ようとしても見にくいかもしれないな。60年前でいえば、昭和17、18年の日本で、『溍東綺譚』を書いた後で東京の下町の偏奇館にひっそり暮らしていた荷風とか、『日本文化私観』を書いていた安吾を捜し出せというようなものだ。(笑)

石橋　すると次の課題は、次に来るものが何かを考えてみる、ということですね。次回はGLOCOM主任研究員の東浩紀さんも交えて、現在起こっていることや次に起こることなども含めて考えてみたいと思います。

(2003年6月2日GLOCOMにて収録)